第３章　成果と課題

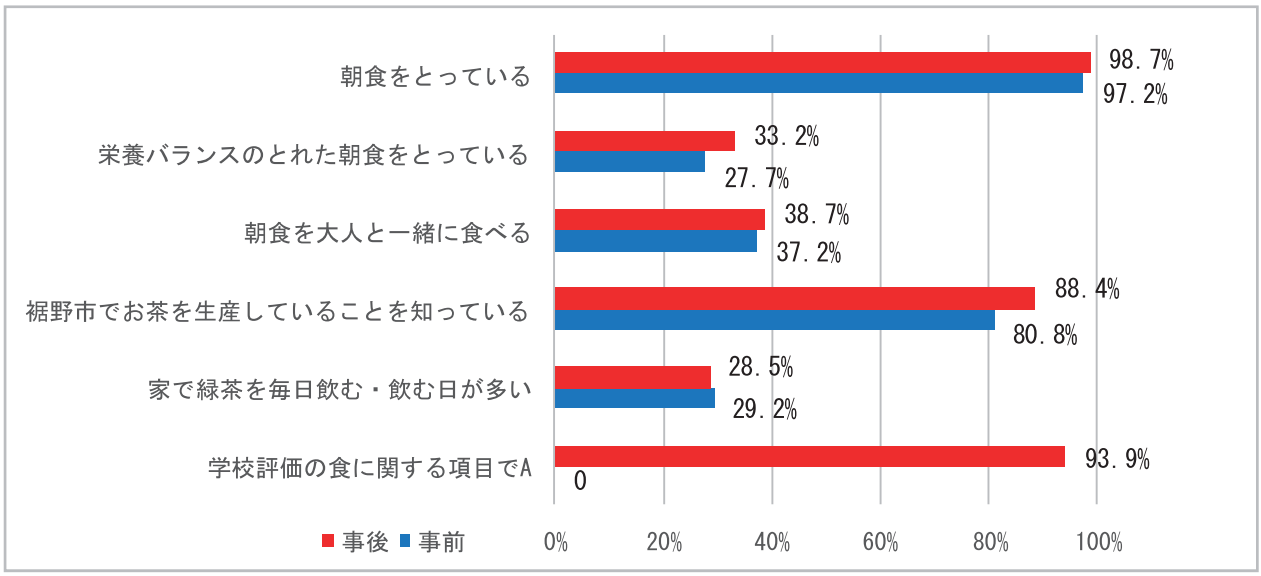
１　裾野市立東小学校の取組

(1) 事前事後調査の結果

事前と事後の調査結果を比較すると、朝食をとっている割合は 1.5%、栄養バランスのとれた朝食をとっている割合は 5.5%、朝食を大人と一緒に食べる割合は 1.5%、裾野市でお茶を生産していることを知っている割合は 7.6%と増加した。他方、家で緑茶を毎日飲む・飲む日が多い割合は 0.7%減少した。しかし、家で緑茶を飲む調査結果の内訳をみると、緑茶を毎日飲む割合は 14.6%から 14.8%（＋0.2%）となり、毎日の習慣としてお茶を飲む家庭が増加した。また、ほとんど飲まない割合は 43.2%から 40.0%（－3.2%）となり、まったくお茶を飲まなかった家庭が、家庭でお茶を飲むようになり、全体的に飲む機会は増加傾向にある。なお、学校評価の食に関する項目でＡの割合については、今年度、評価項目を変更したため、比較はできない。

評価指標	事前	事後	増減	目標
朝食をとっている割合	97. 2%	98. 7%	1. 5%	100%
栄養バランスのとれた朝食をとっている割合	27. 7%	33. 2%	5. 5%	60%
朝食を大人と一緒に食べる割合	37. 2%	38. 7%	1. 5%	55%
裾野市でお茶を生産していることを知っている割合	80. 8%	88. 4%	7. 6%	90%
家で緑茶を毎日飲む・飲む日が多いの割合	29. 2%	28. 5%	-0. 7%	75%
学校評価の食に関する項目でＡの割合	-	93. 9%	-	前年度以上

※事前調査は６月、事後調査は 12 月に実施。



(2) 成果と課題

裾野市立東小学校では、特に家庭とのつながりに成果があった。ＰＴＡの家庭教育学級において、お茶に関する講座を開催することで、保護者の意識を高めることができた。本事業の目標でもある“親も子も共に学ぶこと”に取り組み、家庭教育学級で学んだことを家庭において実践するだけでなく、授業で学級担任及び栄養教諭を支援する形で参画することができた。４年生・総合的な学習の時間では、保護者が家庭教育学級で学んだお茶の淹れ方を活かして、児童の実習の支援を行った。５年生・家庭科の米飯の調理実習では、実習の合間に保護者がお茶のふりかけ、茶飯の作り方を教え、児童が炊飯した米飯に合わせて試食し、茶処・静岡ならではの食事の工夫を学ぶことができた。さらに、そのレシピを家庭向けに配布し、学校での学びを家庭へつながるように啓発することもできた。

課題としては、家庭教育学級に参加する保護者は、もとより学校への関心が高く、協力的な保護者が多いため、学びのつながりを広げることができたが、そうでない家庭とつながりを強くすることが継続及び発展のカギであり、その工夫が求められる。

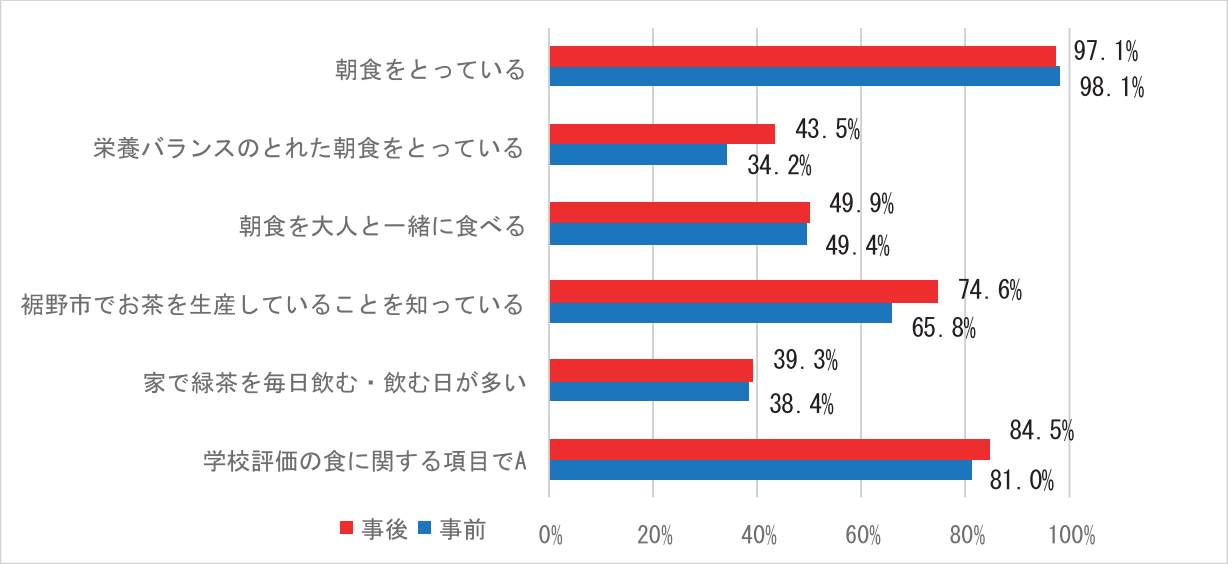
2　裾野市立富岡第一小学校の取組

(1) 事前事後調査の結果

事前と事後の調査結果を比較すると、栄養バランスのとれた朝食をとっている割合は9.3%、朝食を大人と一緒に食べる割合は0.5%、裾野市でお茶を生産していることを知っている割合は8.8%、家で緑茶を毎日飲む・飲む日が多い割合は0.9%、学校評価の食に関する項目でＡの割合は3.5%と増加したが、朝食をとっている割合は1.0%減少した。家で緑茶を飲む調査結果の内訳をみると、緑茶を毎日飲む割合は21.0%から22.2%（＋1.2%）、ほとんど飲まない割合は39.6%から34.5%（－5.1%）であり、裾野市立東小学校同様、家庭でお茶を飲む機会は増加傾向にある。なお、学校評価の食に関する項目でＡの割合の事前は、昨年度の評価とする。

評価指標	事前	事後	増減	目標
朝食をとっている割合	98.1%	97.1%	-1.0%	100%
栄養バランスのとれた朝食をとっている割合	34.2%	43.5%	9.3%	60%
朝食を大人と一緒に食べる割合	49.4%	49.9%	0.5%	55%
裾野市でお茶を生産していることを知っている割合	65.8%	74.6%	8.8%	90%
家で緑茶を毎日飲む・飲む日が多いの割合	38.4%	39.3%	0.9%	75%
学校評価の食に関する項目でＡの割合	81.0%	84.5%	3.5%	前年度以上

※事前調査は６月、事後調査は12月に実施。



(2) 成果と課題

裾野市立富岡第一小学校では、特に地域とのつながりに成果があった。本事業に取り組むにあたり、地域学校協働本部の地域コーディネーターの協力が大きかった。総合的な学習の時間において、地域の茶畑を学びの場として提供してもらうことができ、児童が茶摘み及び手揉みを体験することができた。また、そこで摘んだお茶を製茶して、学校の様々な活動で活用することができた。栄養教諭は、お茶が自分たちの身近なところで作られていることを全校に知ってもらうために、日本茶アドバイザーの資格を活かし、その茶葉から冷茶を作り、和食の献立に合わせて提供した。児童は和食とお茶が合うことを食事を通して実感することができた。

課題としては、当校の校区は、自分の家庭で飲む分の茶葉は、所有する茶畑で賄っている家庭があり、お茶が身近なものとなっているため、学校で教材として扱うには工夫が必要であり、栄養教諭による魅力的な教材の開発が期待される。

3　栄養教諭間の連携及び栄養教諭の研修

(1) 取組結果

モデル校の栄養教諭間で連携して、各校においてお茶を教材とした食に関する指導を行った。家庭科や総合的な学習の時間において、お茶を淹れる体験学習を学級担任等とＴＴで実施した。給食の時間において、学校給食の献立にお茶を食材として使用し、給食時間の放送を活用してお茶の文化や健康効能を啓発するとともに、栄養教諭が直接学級を訪問して指導した。その他、総合的な学習の時間に実施した茶道教室等の企画及び運営に参画し、前年度以上にお茶を教材とした食に関する指導を実施した。

今年度実施した指導内容の中で、家庭科（加熱用調理器具の安全な取扱い）におい

ては次年度の食に関する指導の全体計画に位置付け、社会科（地域学習）や総合的な学習の時間においては、学校長や担当学年主任等と調整を図り、位置付けられるように働きかけている。

評価指標	事前	事後	目標
お茶を教材とした食に関する指導を実践した回数	０回	複数回実施	前年度以上
食に関する指導の全体計画への位置付け	なし	あり	位置付ける

(2) 成果と課題

モデル校の栄養教諭は、お茶の文化、歴史、健康効能、栄養成分等の知識だけでなく、お茶の淹れ方を指導できるスキルを獲得するため、日本茶アドバイザーの資格を取得し、積極的に栄養教諭としての資質向上に努めることができた。

学校の食育は、栄養教諭が中核となって行われるものであり、お茶の食育を推進するためには、栄養教諭の活躍が必須である。モデル校の栄養教諭はその役割を担うことを自覚し、意欲的に自らの資質向上に努めた。

また、校内職員とのつながりを強くするため、校内指導部会への参画、給食の時間の学級訪問、授業前の綿密な打ち合わせ等、積極的に関わり、食に関する指導の校内体制の整備を図っていた。

課題としては、本事業で得た協力体制を維持するために、より実効性のある食に関する指導の全体計画の作成及び運営等の検討が必要であり、校内及び市教委担当者と協力してその資質向上を図るための研修体制を整備することが必要である。